



TITLE:

<大會抄録>長沙六・一惨案をめぐって

AUTHOR(S):

中村, 義

CITATION:

中村, 義. <大會抄録>長沙六・一惨案をめぐって. 東洋史研究 1977, 36(3): 486-486

ISSUE DATE:

1977-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153666>

RIGHT:

長沙六・一慘案をめぐる

中村 義

一九二三年春、中國各地で「旅順・大連回収」、「二十一ヶ條否認」等のスローガンで激しい抗日運動がおこり、ついに「對日經濟絶交」へと發展した。この抗日運動について、先學の諸研究が、民族ブルジョア階級の積極的役割、總商會の活動、日本經濟（とくに綿業）への影響等の側面を明らかにしてきた。

この年六月一日、湖南省長沙の波止場で、群衆が日本商船武陵丸に乗船する中國人にビケをはって妨げ、また日本商品ボイコットを實行していた。これに對して、入港中の軍艦伏見の乗組員十數名は上陸して、發砲し、中國民衆二名を射殺した。所謂「長沙六・一慘案」である。このため、湖南省のみならず、各地の抗日運動は激化することになった。事件そのものについての研究專論はないが、二〇年代湖南省の政治史研究では言及されている。

報告はすでに多くの研究者によって利用されている中國側の湖南關係資料と、それにくわえて、當時の長沙領事報告、「排日傳單」等をもとにして、①事件前後の状況とその影響を紹介し、②運動の中心組織であった「湖南外交後援會」を通して、湖南における民衆運動の特徴を考えてみたい。

ムガル朝のグジャラート地方支配について

近藤 治

キャンベイ灣に點在する良港と地味豊かな農耕地帯を擁したグジャラート地方は、アクバル帝の治世第一七年（一五七二年）、ムガル朝に征服され、政治的にも經濟的にも重要なその一州として併合された。この地方は、これに先立つ約一七〇年間ムスリム地方政權が存続し、さらにそれ以前約一世紀の間はハルジー朝とトゥグルク朝の支配に服していた。従ってムガル朝の支配には、これらの先行するムスリム支配時代からの影響が強いことはいうまでもない。

ムスリム史家の殘したこの地方に關する主要な地方史文獻に『ミラーテシカンダリー』（一六一一年）や『ミラーテ・アフマディー』（一七六〇年ごろ）などがあり、これらを關連する史料と照合しつつ検討していくことによってムガル朝のグジャラート地方支配のあり方を究明していくことが望まれている。

ムガル朝の地方統治についてはP・サラン教授の研究をはじめとする一連のものがあるが、こうした研究をさらに發展させていくための基礎的作業の一つとして、ここではまず、グジャラート地方における在地の社會とムガル朝支配の行政的關係を主とする考察を行ない、ムガル帝國統治の構造的な特質を探り出していく手懸りしたい。